



当支部はじめ 山岳団体が整備 札幌岳・空沼岳縦走路が復活

笹が生い茂り長らく廃道状態となっていた、札幌岳（1293㍎）と空沼岳（1251㍎）を結ぶ縦走路が、当支部など各山岳団体が協力しての笹刈りによって復活し、この秋、全線が開通しました。

廃道化で遭難事故が続発した縦走路

この道は、人気の2つの千メートル峰をつなぐ、札幌近郊では数少ない貴重な縦走路として、かつては多くの登山者を集めていましたが、近年は笹藪の拡大と山行スタイルの変化に伴う登山者の減少により、廃道化が加速。十数年前に有志による笹刈りが行われ、歩けるようになったものの、数年で通行不能に。その後も、当支部を含めて整備の動きがあったものの実現に至りませんでした。

そんな中、2020年、教師を含む高校生ら8名が笹に阻まれてヘリで救助されるなど、ここで3件の遭難事故が連続して発生。これをきっかけに縦走路整備を推進する機運が盛り上がり、同年、当支部の会員でもある佐藤眞札幌山岳連盟会長の呼びかけで、山岳8団体による札幌登山道整備連絡協議会が発足。しばらくはコロナ禍の影響で思うような活動ができませんでしたが、今年に入り、状況が進展。5月に連絡協議会と札幌市、山林を所有する石狩森林管理署の3者で協定書を取り交わし、ついに縦走路の笹刈りを行うことが決定しました。

6月23日に札幌登山道整備隊が札幌岳・豊滝コースから、24日には北海道山岳ガイド協会が空沼岳から笹刈りをスタートさせ、当支部、山のトイレを考える会、道央地区勤労者山岳連盟、札幌山岳連盟などの各団体によるリレー形式の縦走路整備がいよいよ始まりました。

当支部は8月に8人が笹刈りに従事

当支部は8月3日、4日に、山のトイレを考える会、道央地区勤労者山岳連盟との合同で、14名で作業を行いました。3日朝6時30分、豊滝除雪ステーションに集合。林道から車で万計山荘に入り、準備をして8時



30分に出発、前回の団体の笹刈り終了地点を目指しました。この私たちの担当区間は縦走路のほぼ中央と遠く、3台の刈払機の運搬に難儀し、開始地点に着いたのは12時近く。

ここからまず先遣隊が、地形図、GPS、そして勘を頼りに、かつての道の痕跡を探しつつ藪の中を進み、刈り払いルートを確認してピンクテープを付けていきます。**(2面に続く)**

【目次】

- 東北・北海道地区集会和福島の山 …… 3
- 美瑛富士携帯トイレ点検活動報告 …… 4
- 2024年度忘年会のご案内 …… 4
- 岩登り研修報告 …… 5
- 沢登り研修報告 …… 6
- 山行報告 …… 7 -15
- 積雪期の主な山行予定 …… 16

(1面の続き) このルートに沿って、刈払機を持った人が笹を刈っていき、熊手を持った人がこれに続き、刈られた笹をかき集めてサイドに寄せていきます。最後に、刈り残した笹を剪定鋏で適宜切り取って歩きやすくする、こうした作業の繰り返しで前に進みました。

2時間で作業を終了し、17時に万計山荘に帰着。その夜は14名での大宴会で盛り上がりました。

翌日は4時30分に起床し、朝食後、刈払機を1台追加して6時に出発。10時に開始地点に到着して作業を再開し13時に終了。16時30分に万計山荘に帰着し、豊滝除雪ステーションで解散となりました。

現場では、縦走路が北東側の急斜面をトラバースする危険箇所の道を数十本にわたって付け替えるなどの作業もありましたが、それよりも大変だったのは、小屋から遠い現場までの長い移動で、思いのほか消耗しました。

今後も登山道を維持していくために

その後も各団体の作業が続き、予定よりも早く9月18日には遂に縦走路が全通。SNSなどには、縦走路を利用した登山者からの喜びの声が溢れました。

10月5日には笹刈りを担った札幌登山道整備連絡協議会加盟団体の関係者が万計山荘に集まり、開通を祝う集いを開催。翌日、参加者は縦走路を歩きました。

畳張替えと大掃除で一新された白石ルームで夏季交流会開く

8月20日、21日、札幌市内で長年畳店を営んでいた前ルーム担当の常本良一会員と藤木俊三前支部長、現ルーム担当の協力により、白石ルーム会議室の畳の張り替えと布団干しなどを行いました。1階会議室では、古畳14枚をはがして合板で補強し、その上に新畳を敷き詰めました(写真①)。常本会員にはその後、2階窓ぎわの裾板の張り替えも行っていただきました。

8月24日には20人が集まり(写真②)、ルーム1、2階の大掃除と庭木の剪定、雑草抜きを行い、また藤木俊三前支部長が、故障していたルーム屋根上のテレビアンテナを撤去して新しいアンテナを庭の藤棚の木柱に



作業前に万計山荘の前で

この場所が支笏洞爺国立公園内のため、10月28日には、環境省の同国立公園担当者らと連絡協議会のメンバーが、整備された縦走路の実地調査を行いました。

せっかく整備した道もわずか数年で廃道状態になってしまう可能性があります。継続的な登山道のメンテナンス、そして何より、多くの登山者が歩くことで登山道は維持されていきます。連絡協議会でも定期的な巡視や縦走路利用促進のためのイベントの開催も検討していますが、ひとりでも多くの人にここを歩いてもらいたいと思います。

(井田雅之、藤木俊三)

○笹刈り参加者 井田雅之、清瀬博昭、坂本明美、清水義浩、埴原直実、橋本一郎、藤木俊三、山内忠



設置し、1階居間でテレビ地上波を見ることができるようになりました。大掃除後は真新しい畳敷きの上にテーブルと椅子を並べ、20人で恒例の夏季交流会を開き、懇親を深めました。

ルームは不具合も改善し、使い勝手が格段に良くなりました。ぜひ、会議や懇親の場としてご活用下さい。裏方として交流会の食事などの準備をしていただいたルーム担当の谷口美咲会員、北川麻利子会員、手分けして作業にあたっていただいた参加者の皆さん、大変ありがとうございました。(黒川伸一)

第37回東北・北海道地区集会と福島への山へ

佐々木朋代

来年は当支部の主催で洞爺・有珠周辺にて開催予定の東北・北海道地区集会。福島支部の主催により裏磐梯で開催された今年の集会には当支部から11人が参加。その後は福島県の山を楽しむ山行を行った。

7月11日、苫小牧から太平洋フェリーで仙台へ。12日午前10時に仙台港に着き、車窓の風景を楽しみつつ裏磐梯のグランドホテルへ移動。

第37回東北・北海道地区集会の式典には、同地区の7道県支部の他、本部や群馬・埼玉・静岡・京都滋賀・関西の各支部から、総勢76人が参加(写真①)。奥会津郷土写真家の星賢孝氏による「世界を魅了する、奥会津・只見線」と題した講演を聴いた。会場には、只見線を守る列車と四季折々の素晴らしい風景が調和した数々の写真が展示されており、「すべてを効率や採算性に合わせるのではなく、総合的な観光資源を残すことが大切」と熱い想いを語る姿が印象的だった。

懇親会では、郷土食も交えた料理が並ぶバイキングと、各支部が持ち寄ったおいしい各地の日本酒で歓談し、非常に盛り上がった。

13日は交流行事の「猫魔ヶ岳登山」「裏磐梯湖沼群巡り」が企画され、私は猫魔ヶ岳登山に参加。地元、福島支部のリーダー先導のもと、交流しながら歩く。山頂(写真②)の先にある猫石で昼食休憩、雄国沼湿原や会津平野、飯豊連峰の大展望を楽しんだ。



下山後は、周回の準備にあたった福島支部の方々に感謝しつつ、次の宿泊地である磐梯高原・しゃくなげ平の貸別荘へ移動。テラスでパーベキューをしながら、翌日以降のスケジュールについて打ち合わせる。当初は14日に西吾妻山、15日に磐梯山(予備:安達太良山)を予定していたが、好天は14日の午前中までしか続かないようなので、全員で話し合い、14日にまず磐梯山を目指すことに決定。昼には下山できるように、八方台からのコースで登ることになった。

14日午前6時過ぎに八方台コースの登山口よりスタート。ブナの木々が美しい緑の道が続き、途中、苔を美しくまとった祠に、安全登山を祈願する。かつて中の湯という温泉があった場所では、ぽこぽこお湯が沸く様子をすぐ近くで見ることができた。

蒸し暑さもあり、それぞれのペースで進む。日本百名山とあって、老若男女問わず、たくさんの方が登っていた。尾根道では、裏磐梯の湖沼の景色も楽しめ、途中の弘法清水の冷たい湧き水で喉を潤し、最後の登りへ。山頂からは猪苗代湖を望むことができた。綺麗なウスユキソウも多数。山頂では全員笑顔で記念撮影(写真③)。

下山後は、秘湯・赤湯温泉の好山荘で赤湯&白湯の2種類のなかなかレアな温泉を満喫した。

15日は最初に「磐梯山噴火記念館」へ。私たちが訪れた日がまさにちょうど、136年前に磐梯山が噴火した日だと聞かされ、奇縁を感じる。前日登ったばかりの磐梯山やその周辺の様々なことを興味深く学ぶことができた。天気が小康状態に変わったため、浄土平へ向かい、霧の中ではあったが、吾妻小富士のお鉢を歩き、下山後は高湯温泉で開湯400年の歴史ある湯を満喫。仙台港から再び太平洋フェリーに乗り、帰路についた。○参加者 CL 藤木俊三、菊地宏治、北川麻利子、黒川伸一、齊藤宣明、佐々木朋代、谷口美咲、藤原千恵、三浦一恵、吉田郁子、藤原仁

美瑛富士避難小屋携帯トイレブース点検・清掃活動

藤木俊三

十勝連峰の美瑛富士避難小屋には常設のトイレ設備がないため、毎年夏山シーズンだけ携帯トイレブースが開設されます。そのトイレブースの清掃・点検などのメンテナンスは、「美瑛富士トイレ管理連絡会」を構成する道内の山岳団体が持ち回りで、おおむね一週間ごとに現地に入って実施しています。北海道支部も連絡会の構成メンバーで、今年は8月18日が当番日。例年、オプタテシケ山登山などを兼ねて1泊2日の支部山行として実施していましたが、今年は参加希望者が少なく好天も望めないため、点検・清掃だけの日帰りの活動にしました。

メンバーは私と橋本一郎会員の2人。未明に札幌を出発し、6時半前に白金温泉奥の涸沢林道の登山口に到着。悪天候ながら日曜日とあってすでに駐車場はほぼ満車でした。霧雨の中、雨具を着てスパッツ、ザックカバーもつけ6時45分に出発しました。道はぬかるんで滑りやすいうえ、登山道にかぶり気味の笹や木の葉のしずくで全身がずぶぬれになり、ややつらい登りでした。

約4時間で小屋に到着(写真①)、行動食などで空腹をいやして、すぐに小屋の横にある携帯トイレブースの



点検・清掃を実施(写真②)。便座などの汚れや汚物の放置などもなくブースはおおむね清潔に使われており、袋の切れ端や忘れ物と思われるタオルなどをゴミとして回収しました。そのあとは、小屋の周りやテント場の草むら、ハイマツの下を見回り、汚物やティッシュペーパーが放置されていないかを確認しましたが、こちらも特に気になる点はありませんでした。

この日、小屋にいたのは、ナキウサギの撮影で滞在中のカメラマンと、これから下山する登山者2名だけで、テントを張っている人はいませんでした。また、この時期、小屋の周辺で水が取れるところは皆無で、前記のカメラマンも10リットルの水を担いで来たとか。7月なら小屋の周辺は高山植物の花盛りで、少し歩けば水が取れる雪渓などもあるので、来年は当番日をもっと楽しい時期に当たれば、オプタテシケ山登山も組み入れた山行を計画したいと思います。ぜひ、こうしたボランティア活動にも関心を持って参加してもらえればと思います。

○参加者 藤木俊三、橋本一郎



日本山岳会北海道支部 2024年度 忘年会

【日時】12月14日(土) 17:30 - (受付開始 17:00)

【場所】札幌東急 REI ホテル (旧・札幌東急イン)
1階 レストラン「サウスウエスト」
札幌市中央区南4条西5丁目 TEL: 011-531-0109

【会費】6,000円 【申込締切】11月30日(土)

【申込先】井田雅之

岩登り研修●白石ルーム/赤岩

黒川伸一

●ロープワーク研修&懇親会 6月22日/白石ルーム

岩登り研修や沢登り研修を前に、登山で使うロープワークの基本を確認するため、岩登り研修前日の6月23日に白石ルームでロープワーク研修会を開いた。

白石ルーム前の庭木を使い、登山で使うロープの結び方として、①エイトノット(8の字結び)=ハーネスとロープの連結する結び=、②プーリン結び(もやい結び)=支点や人を連結する結び=、③インクノット(クローブヒッチ)=自己確保で使う定番結び=、④半マスト結び(イタリアンヒッチ、ムンターヒッチ)=デバイス消失時の懸垂下降に使う結び=、⑤ダブルフィッシャーマンズノット(二重テグス結び)=ロープを連結する結び=の5つと、摩擦抵抗を生かした3つのフリクションヒッチ、①プルージック、②マッシャー、③クレイムハイスト(バッチマン)の違いとその効果を確認。その上で、ATCなどのデバイスを使った懸垂下降、バックアップのフリクションヒッチの取り方、カラビナを使った半マスト結びによる懸垂下降、ロープ連結時のトップとラスト、ミッテル(中間者)でのロープの扱いやビレイの仕方を確認してもらった。

1年に1回だけの訓練ではあるが、ロープワークは登山やキャンプ、ひいては日常生活や緊急時など、いろいろな状況で使う場面も想定され、参加した皆さんには、何かの機会や場面で思い出してもらえればありがたい。

訓練終了後はルーム内で懇親会。北川麻利子会員、谷口美咲会員、小松理恵子会員らの手になる豚汁などの料理が並び、貴重な懇親の時間を持つことができた。○参加者 北川麻利子、黒川伸一、小玉孝之、小松理恵子、今芳文、後藤幸治、齋藤幸市、佐々木朋代、佐藤精久、高尾美緒、田中健、谷口美咲、名和田豊、長谷川恵美子、藤原千恵、三浦一恵、山内忠、山崎裕侍、横山諒平、吉田郁子、藤原仁

●岩登り研修 6月23日/小樽・赤岩

小樽・赤岩に16人が集結し、後藤リーダー、齋藤サブリーダーの指導のもと、奥リスルートにトップロープ



をセットして登攀技術、ロープワーク、確保を訓練し、今後の沢登り、岩登りに向けて経験値を高めてもらった。

ルートに登った後はそれぞれ、フリクションヒッチでバックアップをとっての懸垂下降。またATCなどのデバイスがない時、なくした時に備え、カラビナによる半マスト結びでの懸垂下降の練習にも取り組んだ(写真①)。

後藤リーダーからは、確保支点における固定分散と流動分散の相違点(写真②)、懸垂下降時やビレイ時のロープの仮固定の方法などをレクチャーしてもらった。

○参加者 CL後藤幸治、SL齋藤幸市、黒川伸一、小玉孝之、小松理恵子、今芳文、佐々木朋代、佐藤精久、高尾美緒、田中健、谷口美咲、名和田豊、長谷川恵美子、三浦一恵、山内忠、吉田郁子

会員・会友の動向

■新入会員 坂本 明美 17324
阿部 幹雄 17346

■退会会員 吉住 琢二 17122

沢登り研修●登別川 - オロフレ峠

高尾美緒

毎年恒例の沢登り研修山行が、7月7日、前週の「有珠山噴火遺構&昭和新山踏査」と同じ「森と木の里センター」キャンプ場に前泊して実施されました。

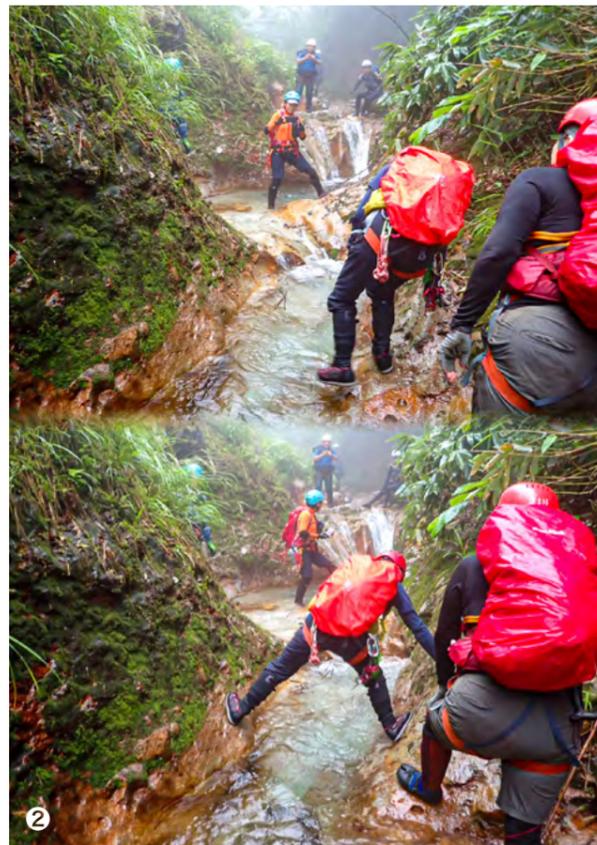
このキャンプ場は、洞爺湖が一望できる高台という素晴らしいロケーションで、併設の天文台では毎週金曜夜に星のおじさん田中氏による天文解説が行われています。6日は、午後4時過ぎにこのキャンプ場に集合。夕食は具沢山スープカレーと藤原さんお手製のピクルスとお漬物。お酒を酌み交わし、楽しい時間を過ごしました。その合間に、沢で使う基本的なロープワーク技術を全員で復習し、22時に快適なバンガローで眠りにつきました。

翌朝はあいにくの雨模様だったため、沢登り研修は、当初予定していた室蘭岳裏沢から、代案の登別川に場所を変更して行くこととなりました。6:30にオロフレ峠展望台に到着し、ここに車2台をデポして、入渓地点のカルルス温泉の林道へと向かいました。7:15にスタートし、少し歩いたところから入渓すると、いきなり巨大な砂防ダムが現れました(写真①)。この沢は記録が少なく、メンバー全員未踏なので、地図を確認しながら慎重に進みます。川床はこれまで見たこともないような真っ赤な色。ちなみに「オロフレ」という地名は、アイヌ語で「水の中が赤い」という意味だそうです。

砂防ダムをいくつか越え、標高420mの二股を右に行くと、一変して白い川床となります。流れる水も透明で綺麗です。ダムの右岸側を巻いて先へ進むと、さらに次々と砂防ダムが現れ、右岸、左岸にある若干の踏み跡(獣道?)を使って巻いていきます。

上流へ進むと、ちょっとしたゴルジュになっていて、小滝がかかっています。ここで沢の基本技術を確認しつつ、滝を越え釜を高巻き、雨中ながら遡行を楽しみ、標高を上げていきました(写真②)。

源頭部に近づく、昔の砂防ダムの残骸なのか、破壊された人工物が数箇所。水の勢いは、人間の作った大きな建造物をもズタズタにしてしまうほどの破壊力なのか



と改めて感じました。

登り切ると、昭和63年にオロフレ・トンネルが作られるまで利用されていた旧道道2号線にぶつかりました。崖を削って作られたこの道路は、当時かなりスリリングな道だったのではないかと思います(写真③)。この旧道をしばらく歩き、車をデポしたオロフレ峠展望台に到着。その後、カルルス温泉湯元オロフレ荘で入浴し、冷えた身体を温めて帰路につきました。あいにくの小雨模様の中の研修山行でしたが、沢シーズン始めの装備確認や足慣らしができました。

○参加者 CL 佐藤精久、黒川伸一、今芳文、齊藤宣明、高尾美緒、谷口美咲、藤原千恵、藤原仁、北原真奈美(部外)

有珠山噴火遺構を訪ね、昭和新山に登頂

6月29日 - 30日 [登山道] 谷口美咲

ドロノキの綿毛があちこちに舞う初夏の洞爺湖有珠山ジオパークを、火山マイスターのお二人、佐々木美穂子さんと酒井史明会員にガイドをお願いして踏査した。有珠山周辺は、当支部が主催する来年の日本山岳会第38回東北・北海道地区集会の会場になっており、今回はその下見を兼ねている。

6月29日は、2000年の有珠山噴火の痕跡が点在する西山山麓ルートと金比羅山麓ルートの計5ヶ所を繋いで散策した。スタート地点の旧「とうや幼稚園」や「わかさいも本舗工場」跡は草木に飲み込まれつつあり、植生が復活してきているのがよくわかる。ルート脇に埋もれている重機の秘密、旧家のお屋敷前に置き去りの車・スカイラインの物語、消えたアパートの謎など、佐々木さんの愉快な解説を聞きながら楽しく歩いた。規制区域にはヘルメットを被って入る。マグマの力で押し上げられた旧国道230号は大きな段差が見もの(写真①)。地熱の残る「NB火口」へはざれた急斜面をこわごわ下る(写真②)。同じく規制区域の「有くん火口」はエメラルドグリーンの水をたたえて美しい。佐々木さん、酒井さんの解説に感心しながら歩き、巨大な砂防ダム上の展望台で本日の踏査を終えた。大地の力を感じることができる素晴らしいルートだった。

洞爺湖を見下ろす高台にある宿泊先の壮瞥町・森と木の里センターでは、手分けして夕食を作り、夕日を見



ながら懇親した。この施設には天文台があり、夜には星空観察も楽しんだ。

30日はよいよ昭和新山を巡る。一般立入禁止地区に入る場合はヘルメット着用が義務付けられている。

観光客と区別するためだそうだ。今では緑で完全に覆われた斜面に登り(写真④)、赤茶けた溶岩ドームの山頂に辿りつく。観光で訪れて何度も見上げていた頂上に立てるとは、夢のような気分だった。眼下には洞爺湖がきれいに見える。亀石の周りで昼食をとったあと、イタドリが生い茂る道を抜けて時計回りに中腹を周回。

天然レンガで覆われた大迫力のドームの下には「紅蓮広場」という草原が広がっていて(写真⑤)、その昔子供たちが野球をして遊んだそう。岩の空洞で子育てをしているハヤブサ3羽が、空に円を描きながらやってきた。警戒というよりも歓迎の鳴き声のように聞こえ、どうかこの環境が長く続き、幸せに育って下さい、と願うばかり。途中、山頂から崩れてきたガレ場を横切る危険な場所もあったが、リーダーの酒井さんの見守りのおかげで、全員無事に下山することができた。

最後に三松正夫記念館を見学。二代目館長の三松三朗さんからウィットに富んだ貴重なお話を伺った。火山活動は災害だけではなく自然の恵みももたらしてくれる。火山は宝物であり、火山とともに生きることが大切だと教えていただいた。来年、東北・北海道地区集会に集まった方々に洞爺湖有珠山ジオパークを楽しく歩いてもらい、火山について少しでも知ってもらえたらいいなと思った。
○参加者 CL 酒井史明、漆崎裕子、小川茉莉、神埜和之、菊地宏治、黒川伸一、小松理恵子、今芳文、齊藤宣明、高尾美緒、谷口美咲、橋本一郎、平松昌子、山内忠、山崎邦子、和田マサコ、佐々木美恵、小野聡子(部外)
ガイド：佐々木美穂子(火山マイスター)

留知暑寒別沢・小函の沢 - 雄冬山

7月20日-21日【沢登り】 黒川伸一

昨年、精久さん、名和田さんらと計画しながら、悪天で断念し、2年越しに実現した留知暑寒別沢「小函の沢」の遡行だった。精久さんの留萌での勤務が終わる8月末より前、そして暑寒別川沿いの橋脚工事が始まる前と考え、このタイミングで実施。精久さんにとっては、増毛山道復活前に苦勞して遡行した思い出深い沢で、かねがねその面白さを聞いていたが、アトラクション満載の噂に違わぬ良沢だった。

7月20日は、増毛市街に全員が集合し、暑寒沢林道入口で車を集約。林道を使って増毛山道「避難小屋」近くに車2台を残置して林道のヘアピンカーブ脇から留知暑寒別沢に入渓した。本流はゴーロ口主体だが、時々小滝が出てきたり(写真①)、きわどいへつりを強いられ、そうこうしているうちに、後方から来た札幌中央労山のTMリーダー率いる4人パーティーに追い抜かれる。TMさんとは志向が似ているのか、山中でよく遭遇する。620㍍の2段の滝手前の良いテン場は中央労山パーティーがテントを張っていたので、その手前を幕営地として、タープ2張りを設営し、焚火を囲んで(写真②)、



①



②



③

今コン担当の豪華な夕食に舌鼓を打った。

翌21日、中央労山パーティーは早々とスタートし、われわれは1時間近く遅れて出発。620㍍の滝は右岸ルンゼを使って高巻いたが、少し手こずった。

小函の沢の出合は、しょぼいので一度見逃してしまい、引き返して分け入る。最初はそうでもないが、やがて「小函」の名の通り、両岸が切り立ったミニゴルジュ地形が続くようになり、滝や釜を高巻くのに時間を要した。シャワー覚悟で小滝に取りついた方が良かったかもしれない。15㍍くらいの淵と小滝は、精久さんのショルダーに健ちゃんに乗っかって突破し(写真④)、順次メンバーの荷物をロープで引き上げるなどしてクリアした。小滝やナメ滝が小気味よく登場し(写真⑤)、飽きさせない。

源頭の水流脇には花が咲き乱れており、癒されながら標高を上げる。沢形は増毛山道近くまであり、やぶ漕ぎをほとんどすることなく増毛山道の1070㍍地点に飛び出した。登山道を使って全員で雄冬山山頂に達し、記念撮影。増毛山道開削で名を残した伊達林右衛門を記念した「林右工門の座所」の標柱は、建立から6年しか経っていないが、すでにかかり傷んできており、風雪などの厳しい周辺環境を窺わせる。あとは増毛山道を使って、車デポ地点である増毛山道の林道合流点に下山、車を回収して増毛市街に向かった。

増毛山道の復活により1泊2日で歩けるようになったこのルートだが、増毛山地らしい奥行き感のある沢だった。○参加者 CL 佐藤精久、SL 名和田豊、黒川伸一、今芳文、高尾美緒、田中健、山崎邦子



④

豊似川・ポン三の沢 - 野塚岳 - 西峰

8月4日【沢登り】 田中健

この週末の支部山行は斜里岳の沢を登る予定だったが、道東が大雨予報となったため、参加者で協議し、日高南部・野塚岳方面に転進。浦河町のキャンプ場に前泊し8月4日朝、雨が降り出す中、野塚トンネルを越えて十勝側へ抜けると、こちらはそれほどの雨ではなかったため、豊似川のポン三の沢を遡行して野塚岳を目指すことにする。

トンネルの脇から谷に入り、時折小雨が降り、ガスもかかる中、巨岩の転がる広い谷をひたすら登る。小滝が現れてちょっと面白くなりかけるが、すぐまたゴーロ帯に。標高800㍍の三股から、野塚岳の西コルへ突き上げる真ん中の沢に入ると、沢は傾斜を増し、三段のナメ滝が現れる(写真①②)。これを越えながら振り返ると、登ってきた沢が見渡せる。5㍍ほどの滝は登れそうで登れないので唯一小さく高巻いた(写真③)。

その後現れる、同じ感じの3つほどの二股はいずれも左へ(写真④)。時折、滝、ナメ滝が現れるが簡単に越えていける。最後は最小限の藪漕ぎで西コルへ。



①

②



③



④

稜線は完全にガスの中。全く見えない野塚岳へ踏み跡をたどり、二等三角点のある山頂に登るが、勿論何も見えない。西コルに戻って今度は西峰へ。そこからは、北西に伸びる尾根をハイマツを避けながらたどり、適当なところから浮き石の多いガレガレの沢を降って三股付近でポン三の沢本流に戻り、野塚トンネルの出口へ降った。その晩は静内のキャンプ場に泊まり、翌日は静内川沿いに高見ダム奥の道の状況を見てから帰札した。

○参加者 L 田中健、黒川伸一、今芳文、山崎邦子

公益社団法人日本山岳会 令和6年度 年次晩餐会

【日時】12月7日(土)

受付◎12時30分 - 17時

講演会◎13時 - 16時30分

晩餐会◎17時 - 20時(入場16時30分)

【場所】京王プラザホテル(東京・新宿)

講演会◎本館5階コンコード・ボールルームC

晩餐会◎本館5階コンコード・ボールルームAB

*詳細は本部から郵送の案内をご覧ください。

*支部単位での参加申込みとなります。11月15日(金)までに下記あてにお願いします。

【申込先】黒川伸一

【参加費】22,000円

(晩餐会出席、講演会入場料含む)

【講演会】

■グレート・ヒマラヤ・トラバース6th

重廣恒夫、吉井修、飯田邦幸、中村三佳

■秩父宮記念山岳賞受賞記念講演

■写真家・菊池哲男氏特別講演

カムイエクウチカウシ山 絶景を求めて

9月7日-8日 [登山道・沢登り] 小玉孝之

9月6日 正午過ぎに札幌を出て、山内車にて一路中札内へ。快晴の空の下、車内には山行の期待が満ち溢れ、気分は高揚する。スーパーで食材等を購入して夕方には札内川ヒュッテに到着。山に囲まれた静かなヒュッテで鍋を囲みながらの酒宴は至福のひとつ。名残惜しい気持ちを抱えながら、翌日の健闘を誓い合い就寝した。

9月7日 午前3時30分に起床。まだ薄暗い中、ヒュッテ前の駐車場には既に登山者の車が並んでいる。身支度を整えて出発し、4時40分に幌尻ゲートに到着。札内川を幾度となく渡渉し、踏み跡を辿ること3時間半、8時15分に八ノ沢出合。テントが2張ある。11時頃、900m三股着。正面にカムエクとカール地形が見えてくる。ここから徐々に斜度がきつくなり、沢が少しずつ狭まる(写真①)。左側の急斜面から滝水が細く白い糸を引いたように流れ落ち、その美しさに見とれてしまう。午後1時35分に八ノ沢カールに到着、ここで幕営となる。

テントを建て、水を汲み、野営の支度を終える頃には、西の空にあった太陽がカムエクの裏側に沈み、テン場が影に蔽われる。気温が一気に下がり、そそくさとテントに潜り込む。湯を沸かし、食事の支度。アルファ米ピラフに長谷川さん提供のレトルトをかけた特製カレーは格別に旨かった。そして、またビールで乾杯。疲れもあり、すぐに眠りに落ちたが、深夜、強風で何度か目が覚めた。

9月8日 午前3時過ぎに起きると、空には満天の星



が輝いている。ご来光を拝むために時間を逆算して4時15分に出発、ヘッドランプで足元を照らしながら進む。東の地平線が徐々に赤みを帯びる。カール斜面を登り、コイカクから繋がる稜線に出ると、東の地平線から太陽が昇り始めた(写真②)。思わず息を呑む



すばらしい光景。しばし見とれて立ち止まり、シャッターを切る。山々の緑が赤みを帯びて、とてもきれいだ。

山頂まで、もうそう遠くない。急な岩場を慎重に登る。リッジから見下ろす東側の斜面は切れ落ち、崖そのもの。誤って滑落したら大けがでは済まない。稜線上に点在する三箇所の特設テント場はすべて埋まっていた。テントの主たちは、昨夜は強風でよく眠れなかったようだ。やはり八ノ沢カールでのテント泊は正解。山内さんには感謝。

そして5時50分、念願のカムイエクウチカウシ山の頂に立つことが出来た(写真③)。空は澄んで雲一つ無く、全方位、遥か彼方まで山々が見渡せる。日高山脈の山の連なりは鋭く険しく(写真④)、その圧倒的な存在感に魅了される。本当に感動した。この景色を見るためにここを登ったのだとあらためて自覚させられた。各自思い思いに写真撮影、十分絶景を堪能した後、下山を開始した。7時55分に八ノ沢カールのテント場に到着、撤収して8時30分下山開始。10時35分に三股、午後1時15分に八ノ沢出合に到着。ダラダラと長い河原と林道を歩き、午後5時10分に幌尻ゲートに下山した。

下山後、帰札の予定であったが、時間が遅く、また全員が既にリタイアの身である気楽さ故、翌日帰札することにして剣小屋へ。反省会と称し、またまた酒宴となった。空腹と疲れた体に流し込むビールの味は格別で、鍋を囲んで酒が進み、楽しいひとときを過ごすことができた。

4日間素晴らしい天候に恵まれ、一生忘れられない思い出を残せた。山内さん、長谷川さんには唯々感謝するばかり。いつの日かもう一度、この山に登りたい。

○参加者 L 山内忠、小玉孝之、長谷川恵美子

小田西川源流“内院”から狩場山へ

9月7日-8日 [沢登り] 田中健

道南の最高峰・狩場山から東に東狩場山、フモンナイ岳、西に前山、オコツナイ岳と翼のように延びる稜線は、地形図で見ると顕著な馬蹄形を成し、まるでカルデラのような(実際のところは不明)。そのど真ん中を日本海へと流れ下る小田西川を遡って“狩場内院”に入り、源頭に聳える狩場山に登りたいと、1泊2日の山行を企画した。

島牧村の江ノ島海岸で前泊して9月7日、下山地の狩場山新道登山口(当初は茂津多コースを下山予定だったが、長いので新道に変更)に車を1台デポしたのち、栄浜稲荷神社横から林道を入ったところに車を停めて7時に出発。林道を少し歩き、小田西川河口近くに連続している砂防堰堤をかわしたあたりから入渓する。

すぐに初日の核心部たる、スケールの大きい巨岩帯。この日は水量かなり多く、水流激しく、重荷と相まって難儀する。平水なら楽に中を行けるところも、今日は何度も高巻きや渡渉を余儀なくされる。巨岩で周りが見えず、ルートを見定めるのも一苦労(写真①)。それでも、北海道では道南にしかないブナの巨木とナメ床には癒された。15時30分に620m二股の幕営地に着く。ここで2名が岩魚を釣り上げ、美味しくいただいた。

8日は6時20分に出発、すぐに右の小田西川本流に入る。倒木や張り出した枝に悩まされつつ進み、840



m付近に10mほどの3段の滝。1段目の上で左岸から右岸に渡りたいが、水流激しく、足下も見えないので(写真②)、ロープを出して左岸の岩を登り、2段目の上から右岸へ。全員この滝を越えるのに1時間以上かかった。

950mを越えて傾斜が出てくると、沢は英語で言うカスケード、ナメ滝の連瀑帯となる。ぐんぐん高度を稼げるところだが、疲れた体にはきつい。そして1100m付近でついに現れた30m大滝(写真③)。ほぼ涸滝だが垂直に近い断崖状で圧巻。迷わず左岸の草付きのルンゼ状から大きく高巻く。木のあるところまで上がってから左へ、笹と灌木を漕いで尾根を乗越し、本流に戻ろうとすると、また同じような断崖状の10mほどの涸滝になっているの見える。改めてこれも高巻くことになって再び数へ。一連の高巻きに1時間半を要した。

沢に戻ると、さすがに源流部の様相。涸れた沢床にまだまだ続く急な岩場を、甘くないイチゴをもいで口にしつつ登っていく。源頭は北海道には珍しい気持ちのいい草原。振り向けば日本海とフモンナイ岳・東狩場山の稜線が見える(写真④)。自分が“狩場内院”の中にいることを初めて実感。最後にちょっとした笹(とわずかなハイマツ)の藪漕ぎがあり、16時20分ようやく、一等三角点の山頂着。歩きにくい新道を下り、全員疲労困憊して登山口にたどり着いたときには19時になっていた。

今回は、あまり「内院」を感じる事ができなかった。次は積雪期にスキーでここを訪れてみたい。

○参加者 L 田中健、黒川伸一、今芳文、名和田豊、大島聡子

お月見山行 愛山溪温泉 - 松仙園

9月17日-18日【登山道】 藤木俊三

秋恒例の「お月見山行」は例年、道南の山を対象に、近年は温泉宿泊、札幌発着の貸し切りバス利用という形で実施してきましたが、バス料金の高騰などのため、今年からは自炊の愛山溪温泉宿泊（写真①）、自家用車乗り合わせによる大雪山の松仙園トレッキングとしました。日程も、大雪の紅葉の見ごろに合わせ、例年の道南よりも約1カ月早く、中秋の名月の時期としました。

今回の参加者は会員・会友合わせて10名で、9月17日に車3台で愛山溪温泉に向かいました。この日は雲が多いながらもまずまずの天気で、午前中に愛山溪に着いた7名は足慣らしもかねて温泉から40分ほどの「雲井ヶ原湿原」を散策しました。今年の大雪山の紅葉はやや遅れ気味で、標高約1000mの温泉周辺も、まだ始まったばかりという感じでした。ところどころに大径木のアカエゾマツなどが残る樹林帯の中の緩やかな山道を登るとやがて平坦な道になって、樹林帯を抜けると草紅葉の美しい雲井ヶ原湿原に出ます。小さいながらアカエゾマツに囲まれた湿原は池塘をちりばめ、奥には愛別岳はじめ比布岳、安足間岳、永山岳の峰々が連なります。到着時は雲に隠れていた愛別岳が、青空をバックに荒々しい姿を見せ始めたのは、なかなか感動的でした。

宿に戻ってひと風呂あびてから、私の担当で山形名物「芋煮」とソース焼きそばの夕食を作り、4時半過ぎに「月見の宴？」を開宴。途中から支部会員で愛山溪温泉の管理運営を引き受けているりんゆう観光の植田拓史社長も加わり、楽しい宴になりました。十五夜お月さんも雲の間からチラリと顔を出してくれました。

翌18日は、体力面などを考慮して4名が、車で層雲峡へ移動してロープウェイ利用の黒岳往復登山に変更したため、松仙園トレッキングは6名で行くことになりました。午前6時半少し前に温泉を出発し、20分ほど林道跡を歩くと、2020年に復元された松仙園コース入口に



着きます。ここから沼の平方面登山道との合流点「八島分岐」までは一方通行というルールになっています。また、原生的自然環境の保護のため、通れるのが7月半ばから9月末までという期間限定のコースです。

前々日に降った雨でややぬかるんだ、ダケカンバなどの広葉樹が主体の樹林帯の中の道を登ることおよそ2時間。視界が開け、旭岳や当麻岳、安足間岳、愛別岳などを望む広い湿原「松仙園」に出ました（写真②）。池塘がある湿原の核心部は木道が整備されていますが、休憩スペースはありません。ただ、せつかつなので、眺めの良い木道の上で早めの昼食を食べながら休憩。平日だったので、幸いにも他の登山者の歩行の妨げになることもなく、秋晴れの下、素晴らしい眺めを堪能しました。

その後はいったん樹林帯に少し下り、登り返して一段高い「四の沼」がある湿原に出ます。黄金色の草原に青空を映す池塘、色づく木々と緑のハイマツが織りなすコントラストが天上の楽園の雰囲気を醸し出します（写真③）。約4時間で、逆行防止のためのゲートが設置されている「八島分岐」に到着。半月沼を往復したあと、沼の平分岐から三十三曲がりを下り、愛山溪温泉に戻りました。この日は天候に恵まれ風もなく絶好のトレッキング日和で、行動時間は休憩も入れて6時間10分でした。○参加者 L 藤木俊三、一鐵巖、神埜和之、小松理恵子、新井田幸子、藤野和男、藤原千恵、外山知子、波田初子、藤原仁

北日高・剣山/久山岳敗退

9月21日-22日【登山道】 中田由美

9月の紅葉始まりの季節に、十勝の清水町にあるキャンプ施設「遊び小屋コニファー」のバンガローに1泊して8人で剣山と久山岳に登ってきました。今回は黒川さんをお願いして、私の勤めるサッポロビールの先輩、加藤さんを初めてご一緒させていただきました。

9月21日は朝6時半に恵庭の道の駅に集合のはずが、諸事情で8時半に道東道・夕張SA集合に変更となり、お初の顔合わせもそこそこの一路、剣山登山口へ。

剣山神社に皆で手を合わせ、脇のブロック作りの山小屋「剣山休憩所」を少し覗いて、曇天の中10時に登山開始。登り始めには、ぼつらぼつらとお地蔵様があり、それらが見られなくなってくる頃から急傾斜の直登になりました（写真①）。今シーズン仕事を言い訳にろくに登っ



ていない私は、「最近太ったし、しんどいなー」と思いながらも久しぶりの支部山行の雰囲気を楽しみ、前後の方とおしゃべりしながら、お花を探しながら、歩を進めました。でもこの季節なので、道中見つけれられたのは、終わる寸前のエゾトリカブトだけでした。



頂上は岩盤の傾斜が急でスペースも狭く、なかなかスリリング（写真②）。曇天ながら十勝平野がきれいに見える、他の山ではあまり味わえない信仰的な雰囲気が新鮮でした。下りは、早くビールが飲みたいで無心だったので、よく覚えていません。

宿泊先の「遊び小屋コニファー」は手作り感たっぷりの雰囲気がとても素敵なキャンプ場で、ここで初めて名和田さんとお会いしました。バーベキューでは、黒川さんお手製の串打ちねぎまを美味しくいただきました。名和田さんは山菜採りに精通されていて、石丸さん、平松さんと「山菜トーク」で盛り上がっていて、諒平さんと加藤さんはマニアックな釣りの話題で盛り上がり、黒川さんが加藤さんを熱く山スキーに誘ったりして、楽しく夜が更けていきました。

翌22日の久山岳は、登山ポストからかなりの荒廃ぶりで、1時間以上藪漕ぎで前に進んだものの（写真③）、登山道を見極めきれず途中撤退となりました。でも思わぬ所で藪漕ぎができて、思い出深い山となりました。後日、黒川さんがリベンジでピークに到達されたそうで、さすがと思いました。

帰路に共有されたGoogleフォトアルバムでは、やっぱりオノサトちゃん（小野聡子さん）の撮る写真は素敵だな、と思ったのでした。皆さん楽しい週末をありがとうございました。

○参加者 CL 横山諒平、黒川伸一、中田由美、名和田豊、平松昌子、石丸なみ、小野聡子（部外）、加藤雅也（部外）

北海道高山植物保護ネット市民フォーラム、2年ぶりに開催

11月23日に、当支部も加盟団体となっている北海道高山植物保護ネットの市民フォーラムが2年ぶりに開催されます。

プログラムとしては講演と各地からの報告が予定されており、梅沢俊さんらが講演を行います。興味のある方はぜひご参加ください。

【北海道高山植物保護ネット市民フォーラム】
日時●11月23日 13:30-17:00 (13:00開場)
場所●北海道大学農学部 大講堂 (S401)
講演●梅沢俊「花の迷宮」
首藤光太郎 (北海道大学総合博物館)
「北海道の山地で最近見つかった日本新産植物とその傾向」

濃屋山道 - ルーラン海岸 / 送毛山道 - 愛冠山

10月13日 - 14日 [古道] 黒川伸一

幕末に開削された2つの山岳古道を歩く山行を、石狩市・濃屋自治会の濃屋会館を拠点に実施。キノコなどの秋の味覚採取を兼ねて歩いた。今回たどった道は、かつてのアツタ場所請負人・浜屋与三右衛門が幕府の命で開削した濃屋山道と、ハママシケ場所請負人・伊達林右衛門が私的に開削した送毛山道。

10月13日は、濃屋山道・安瀬口から、ルーラン海岸の核心部、旧厚田村の名所だったブトシマナイのアモイの洞門を訪ねた。山道中ほどから、閉鎖されたルーラントンネル脇を経由してブトシマナイ川最下流部を下降し、ブトシマナイの海岸に出て、かつて車で行けた旧厚



2024年10月13日のアモイの洞門「義経の涙岩」が海に落ちている!



2022年9月10日のアモイの洞門「義経の涙岩」はまだ上にあった



田村随一の名所・アモイの洞門前を訪れた。2年前の支部山行では旧国道を歩いてこの地に入ったが、濃屋山道からも往来が容易であることが確認できた。

驚いたのは、アモイの洞門上部あった「義経の涙岩」が海に落下していたこと (写真①)。旧厚田村に載る伝説によると、源義経が衣川の戦いに敗れて、陸奥の国から蝦夷ヶ島に逃れ、積丹半島・神威岬から海路を北上途中、ルーラン海岸のアモイの洞門を発見して「二度と訪ねることができない」とブトシマナイの海岸に上がる。この地で数夜を過ごした際、洞門の中に下弦の月の月光が岩肌に照り返して虹のような美しい光景となり、義経は酒を酌み交わしながら、在りし日の静御前を思い出して「吾がいらつめは物な思いそことしあらば火にも水にもわれなげなく」と歌って涙したという。洞門の上の今にも落ちそうな岩が、この時の義経の「涙岩」と呼ばれて伝承されてきたが、まさに落涙の結末ということなのだろうか。

その後は、濃屋山道に戻って濃屋口まで移動し、温泉で汗を流した後、濃屋会館で、12人で懇親会を開いた。

翌14日は、送毛山道から送毛第一林道を経て愛冠山(466㍍)へ (写真②)。道中、参加者各々で山ウドウ、コクワ、キノコを採取し、収穫の休日となった。

○参加者 CL 山崎邦子、SL 黒川伸一、今芳文、後藤幸治、高尾美緒、中沢友佑、名和田豊、平松昌子、藤田宗昭、増田智朗、吉田郁子、佐々木美恵

夏山納め / 冬・春山始め「持ち寄り」懇親会を11月23日開催

夏山シーズンが終わり、冬・春山シーズンが始まるのを前に、「夏山納め・冬山始め」懇親会を、11月23日に開きます。最低限の簡単なメニューは用意しますが、飲み物、食べ物は、各自持ち寄りをお願いします。会費は1人500円程度。冬から春の山行予定など、山談義の場としたいと思います。参加希望者は11月18日までに。

【日時】11月23日(土・祝)12時～

【場所】白石ルーム

【申込締切】11月18日(月)

【申込先】黒川伸一

江差三山(元山 - 笹山 - 八幡岳)縦走

10月20日 [登山道] 黒川伸一

18世紀の創建以来、山岳信仰の霊場として歴史を刻んできた笹山(611㍍)。その笹山と肩を組むように江差の街の背後にそびえる元山(522㍍)と八幡岳(665㍍)。この三山をつなぐ稜線を、10月20日、5人で縦走した。

前日の19日は、乙部町の樹齢500年超の連理の巨木・縁桂を訪れ、江差・いにしえ街道の漆家具材ギャラリー「江差塗工房」に2年連続で泊まらせてもらい、いにしえ街道の仕掛け人で宿主でもある室谷元男さんと6人で懇親した。

日本海を見渡せ眺望抜群の元山(写真①)、山頂に笹山稲荷神社の社殿(写真②)が鎮座する信仰の山・笹山、北海道で最初の一等三角点があるブナの美林の山・八幡岳(写真③)。3つのピークはそれぞれに特色があって、これを一度に踏めるメリットは大きいと感じた。

三山を貫く縦走路ができたのは2001年と新しい。江差の市街地からも近く、低山ながら気軽に歩ける素晴らしい縦走ルートであることを確認できたことが、収穫だったかもしれない。



①



②



③

○参加者 CL 齊藤宣明、黒川伸一、佐藤精久、石丸なみ、佐々木美恵

第30回北海道雪崩講習会 11月24日開催 <11月8日申込締切>

北海道支部と、支部会員の企業・りんゆう観光、秀岳荘が協賛している「第30回北海道雪崩講習会」が、11月24日の総合理論講座で開講し、実地講習は道央校が1月25日・26日に中山峠周辺で、道北校が2月1日・2日にグリーンパークびっぴ周辺で開催されます。

支部では2007年11月に上ホロカメットク山山域で11人パーティーが雪崩に巻き込まれて4人が亡くなる事故を経験、この事故を契機に本講習会に関わり、多数の

支部会員が講師として関わっているという経緯があります。

受講料は、基本クラスと中級クラスが1人1万5000円、総合理論講座(11月24日、オンライン)だけの受講は1人2000円です。

*詳細は下記参照。

受講申込みは申込みフォームから(締切:11月8日)

●北海道雪崩研究会ホームページ

<http://kenkyu.h-nadare.com/>

2024 - 25 積雪期の主な山行予定

- 12月 7日 (土) ~ 8日 (日) ●上ホロカメットク山周辺【冰雪訓練】 L: 後藤幸治、齋藤幸市
白銀荘泊 ※申し込みは黒川まで
- 12月21日 (土) ~ 22日 (日) ●三段山、上富良野岳、前十勝、富良野岳【山スキー／雪崩対策訓練】 L: 黒川伸一
上富山荘泊
- 12月25日 (水) ●盤溪山【スノーシュー、ツボ足(長靴)】 L: 藤木俊三 日帰り
- 12月28日 (土) ●迷沢山 上平沢林道ルート【山スキー】 L: 山内忠 日帰り
- 1月 2日 (木) ●喜茂別岳周回【山スキー】 L: 黒川伸一 日帰り
- 1月 3日 (金) ●尻別岳【山スキー】 L: 黒川伸一 日帰り
- 1月15日 (水) ●馬追丘陵【スノーシュー】 L: 藤木俊三 日帰り
- 1月18日(土)or19日(日) ●百松沢山周辺【山スキー】 L: 田中健 日帰り
- 2月1日(土)or2日(日) ●恵庭溪谷【アイスクライミング】 L: 齋藤幸市 日帰り
- 2月 1日 (土) ●飛散岳 - 飛散岳北峰【山スキー、スノーシュー】 L: 黒川伸一 日帰り
- 2月 2日 (日) ●札幌岳 豊滝ルート - 東斜面【山スキー】 L: 黒川伸一 日帰り
- 2月 8日 (土) ~ 9日 (日) ●武華山、天幕山、チトカニウシ山【山スキー】 L: 黒川伸一
層雲峡オートキャンプ場コテージ泊
- 2月8日(土)or9日(日) ●白井岳 朝里岳沢ルート【山スキー】 L: 山内忠 日帰り
- 2月10日 (月) ~ 11日 (火・祝) ●室蘭岳【山スキー、スノーシュー】 L: 藤木俊三
白鳥ヒュッテ泊
- 2月11日 (火・祝) ●恵庭岳【冰雪】 L: 田中健 日帰り
- 2月15日(土)or16日(日) ●無意根山、千尺高地 胡桃沢林道ルート【山スキー】 L: 佐藤精久 日帰り
- 2月20日 (木) ~ 23日 (日) ●羊蹄山・ニセコ周辺など【山スキー】 L: 橋本一郎
京極山荘泊
- 3月 1日 (土) ~ 2日 (日) ●幌別岳、寿都天狗山、観音山、写万部山など【山スキー】 L: 黒川伸一
黒松内ぶなの森自然学校泊
- 3月20日 (木・祝) ●北白老岳 - 白老岳【スノーシュー、山スキー】 L: 藤木俊三 日帰り
- 3月28日 (金) ~ 30日 (日) ●狩場山“内院”【山スキー】 L: 田中健
テント泊 *予備日3月31日(月)
- 4月 2日 (水) ●塩谷丸山【山スキー、スノーシュー】 L: 藤木俊三 日帰り
- 4月 4日 (金) ~ 6日 (日) ●ニペソツ山【山スキー、冰雪】 L: 田中健
テント泊 *予備日4月7日(月)
- 4月中旬 ●群別岳・尾白利加山(奥徳富岳) or【山スキー】 L: 黒川伸一 テント泊
浜益御殿・雄冬山・浜益岳

*行先や日程は変更になる場合があります。また随時山行を企画します。その都度 ML や本紙などでお知らせします。

*実施日の1~2週間前までに、各リーダーまでお申し込みください。